

---

◆◆◆ 編 集 後 記 ◆◆◆

---

平成9年に臨床教育実践研究センターが発足して以来、今年度で26年目となりました。平素よりご指導、ご支援をいただいております皆様方のお力添えに、心より深く感謝申し上げます。

本紀要においてはこれまで、前年度に開催された当センター主催のリカレント教育講座のシンポジウムならびに外国人客員教授による公開講座の講演の抄録を掲載してまいりましたが、昨年度は一昨年度より続いた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、リカレント教育講座と公開講座のいずれも開催中止とせざるを得ず、今号への抄録掲載も叶いませんでした。しかしながら、今年度はリカレント教育講座と公開講座の双方を3年ぶりに対面にて開催することができ、多数の参加者に恵まれ、好評を得ました。それぞれのシンポジウムや講演の抄録については、次号にて掲載を予定しております。

今号では、大学院生による4本の論文を掲載いたしました。いずれも個人による文献研究に基づいた論文で、それぞれの研究や臨床実践を通じて関心をもったテーマについて、様々な切り口で心理臨床学的考察がなされております。その内容は多岐にわたり、今後広く参照されることが期待されます。これらの諸論文を通じて、当センターの多様な活動の一端を感じていただければ幸甚に存じます。

当センターも設立から26年目となりますが、心理教育相談室での活動を基礎に置き、日々の臨床実践を大切にするという姿勢は当初から変わらずにあり続けています。COVID-19の流行下においても相談室内での感染拡大が起こらず、また一度も相談室を閉室することなく今日に至っていることは、ひとえにクライアントの皆さまと相談室スタッフの双方が感染対策の徹底を継続してきたことの賜物であろうと思われれます。世界情勢もますます混迷を深め、人々のところを取り巻く環境が様々な次元で日々刻々と変化してゆく昨今において、心理臨床の重要性はますます増してくるものと考えられます。先行きが不透明な状況ではありますが、だからこそ目の前の臨床実践を大切に、真摯かつ丁寧に取り組んでいく姿勢を今後も保ち続けていきたいと思っております。

皆様方には、本紀要について忌憚のないご意見、ご感想をお寄せいただければ幸甚に存じます。今後とも当センターにご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター編集委員会

豊原 響子